

## 下顎前歯部埋伏過剰歯の1例

池 嶋 一 兆

### A Case of Impacted Supernumerary Tooth in Mandibular Incisal Region

Katsuyoshi IKESHIMA

We experienced a case of impacted supernumerary tooth on mandibular incisal region in a 6 year old boy. Determination of the impacted tooth position was by using 3D-CT and it was extracted under general anesthesia taking his age into consideration. Stafne reported a rate of occurrence of supernumerary tooth as 0.9% in 1932 and Okamoto said about a impacted supernumerary tooth apperence ratio on mandibular as 0.01% in japanese (1963). From the above, we considered this was very rare case, and reported.

Key words : impacted supernumerary tooth, mandibular incisal region

#### 緒 言

過剰歯は上顎前歯部が好発部位であり、同部における正中離開や一般的な歯科診療の目的で撮影されたX線写真により、偶然に発見されることが多い。今回著者は、下顎正中部に認められた埋伏過剰歯の1例を経験したので、その概要を報告する。

#### 症 例

患 者：6歳、男児。

初 診：平成16年1月13日。

主 訴：下顎切歯の萌出遅延。

現病歴：既に両側下顎第一大臼歯が萌出して下顎前歯部交換期に達し、間もなく7歳になろうとしている状態にもかかわらず、後継永久歯の萌出遅延を母親が疑問に思い、精査を希望されて某歯科医院を受診した。同医院においてX線写真診査を受け下顎前歯部埋伏過剰歯を指摘され、平成16年1月13日に紹介により当科を受診した。  
既往歴：特記事項なし

家族歴：特記事項なし

現 症：全身的な問題は認められず、顔貌は左右対称であった。口腔内においては両側下顎第一大臼歯の萌出を完了した混合歯列弓であり、右側乳中・側切歯は癒合歯であった(図1)。デンタルX線写真では、図2のように独立する歯髓腔を有する癒合歯と左側乳中切歯との根尖部分に5個の歯冠様陰影を呈する像を認めた。埋伏過剰歯を特定するためにCTを撮影したところ、図3、4の様に正常永久歯は乳歯列弓の舌側に位置しており、癒着歯と左側乳中切歯間に捻転するような状態で存在している歯牙を過剰歯と判断した。

処置および経過：下顎正中部埋伏過剰歯の臨床診断名のもと、同年1月26日に日帰り外来全身麻酔下に抜去術を施行した。術式は両側乳犬歯遠心歯頸部間にWassmund法に準じた切開を加え、通法に従い粘膜骨膜弁を形成し、翻転した。埋伏過剰歯相当部の骨を骨ノミにて除去して患歯を露出させ(図5)、ヘーベルを用いて歯牙を脱臼させた後に抜去した。術創の止血を目的

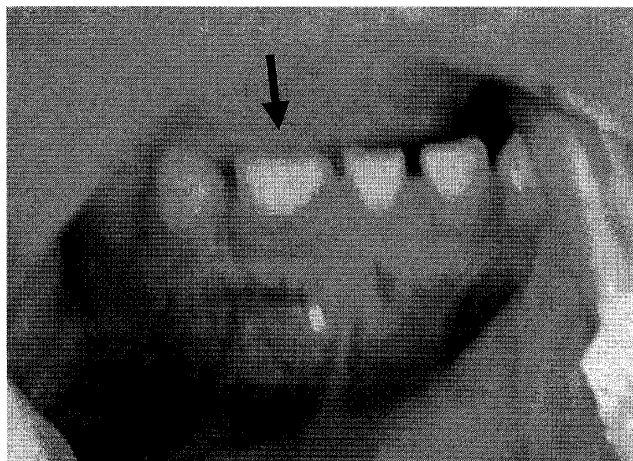


図1 口腔内写真

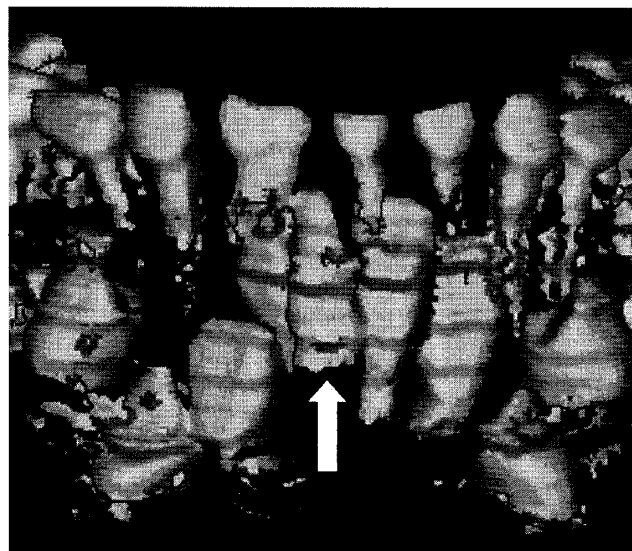


図4 3D-CT 正面観



図2 デンタルX線写真



図5 埋伏過剰歯露出時



図3 3D-CT 咬合面観

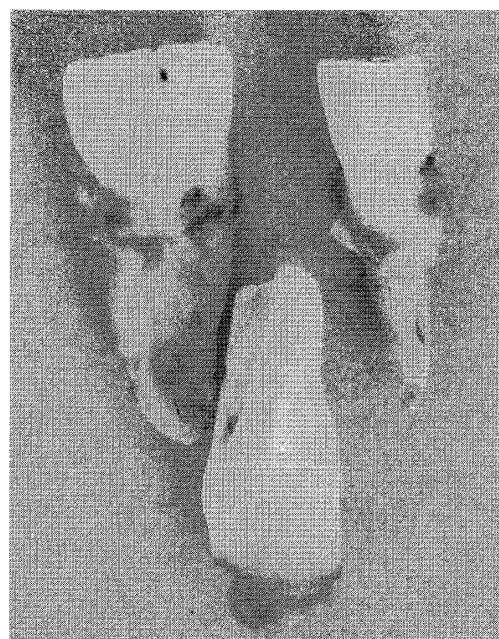


図6 抜去した埋伏歯および乳中切歯

として抜去部にはスポンゼルを挿入した。また、後継永久歯の萌出が順調に行われるように癒合歯と左側の乳中切歯を同時に抜去し、術創は完全に縫合閉鎖した。術後は、病室に一時着床させ、全身麻酔よりの完全覚醒と術創の止血を確認した後に、帰宅させた。以後の術部洗浄や抜糸および永久歯萌出までの経過観察は紹介元に依頼した。現在までに、紹介医より順調な回復を認めたために一週間後に抜糸し、以後の経過も良好で、後継永久歯の萌出も認められているとの連絡を得ている。

抜去物の肉眼的所見：図6のように、抜去された過剰歯は歯根未完成の切歯様形態を呈しており、周囲との癒着や歯嚢以外には被包する皮膜などの存在は、認められなかった。

### 考 察

本症例における埋伏過剰歯の特定に際しては、デンタルX線写真やCT（単純）写真に加えて3D-CT写真を応用した。その結果、現時点で口腔内に萌出している乳歯と後継永久歯の位置的関係を立体的に把握することが容易であった。このことから3D-CT写真は埋伏過剰歯の特定には非常に有効な手段であり、その必要性和有用性が再認識された。

歯数異常に関して、石川ら<sup>1)</sup>は正常の乳歯あるいは永久歯の歯式より、多い場合（過剰歯）と反対に少ない場合（欠如歯）があるとしている。Dolder<sup>2)</sup>は歯数過剰（0.3%）の方が歯数不足（3.4%）よりも少ないと報告し、永久歯群における過剰歯の出現頻度に関してStafne<sup>3)</sup>は48,550名の患者についてMayo Clinicにおいて行った検査成績を0.9%であったと述べている。一方、日本人における下顎での過剰歯の出現頻度を岡本ら<sup>4)</sup>

は0.01%位とし、特に湯浅<sup>5)</sup>が行った1,260名の幼稚園児および学童に対する検査では、1例も認められなかったとしている。また、発生を部位別に見ると、Stafne<sup>3)</sup>は下顎前歯部での出現を上下顎犬歯部に続く第3位の低さ（2%）であったと報告し、さらに上顎中切歯部に見られた200本の過剰歯における埋伏と萌出との比は、186（93%）：14（7%）であったとしている。以上のことより、本症例は極めて稀有であると考え、報告した。

### 結 論

今回、著者は6歳男児の下顎前歯部に認められた埋伏過剰歯の1例を経験したので若干の臨床統計的考察を加えて報告した。

また、本症例の埋伏過剰歯の決定や、埋伏位置の判断に際しては、3D-CT写真を用いての診断が非常に有効であった。

### 文 献

- 1) 石川 梧朗, 秋吉正豊：I. 歯の発育異常. 口腔病理学 I. 第2版；23-34 永末書店 東京 1990.
- 2) Dolder, F. : Zahn-unterzahl. Schweiz Mschr Zhk 46 ; 663 1936.
- 3) Stafne, E. C. : Supernumerary teeth. Dent Cos 74 ; 653 1932.
- 4) 岡本 治, 斎藤光正, 今井 悟, 藤川政男ほか：下顎に於ける過剰歯16症例. 歯科学報 63 ; 552-558 1963.
- 5) 湯浅泰仁：乳歯列に於ける歯数異常と後継永久歯に対する影響との統計的観察. 歯科学雑誌 1 ; 207-214 1944.

著者への連絡先：池嶋一兆, (〒963-8611) 郡山市富田町字三角堂31-1 奥羽大学歯学部附属病院  
Reprint requests : Katsuyoshi IKESHIMA, Ohu University Dental Hospital.  
31-1 Misumido, Tomita, Koriyama, 963-8611, Japan